

イスラーム建築の華

Brick and Tile in Central Asia

author 辻 孝二郎 | Kojiro Tsuji

辻 孝二郎 — INAXライブミュージアム館長/1948年生まれ。1971年、早稲田大学卒業。同年、INAX入社。営業、商品企画、XSITEHILL、広告宣伝部を経て、2005年より現職。

[レンガからタイルまでの総集編・中央アジア]



施釉レンガ:レンガの一面に施釉し、レンガ面の組み合わせでデザインする。多くの建築物を仕上げるために、工期短縮のねらいもあったといわれている [15世紀/最大長170mm/ウズベキスタン、サマルカンド]



浮彫無釉レンガ:レンガに立体的な文様を施すのも地域の特徴的なもの。幾何学と陰影が織り物のように建築表面を覆う [12世紀/340×520×40mm/ウズベキスタン、ブハラ]



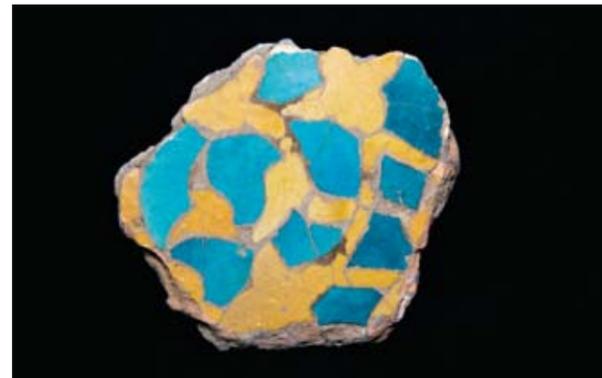
浮彫施釉レンガ:いったん、表面全体に青の釉薬をかけた後、表面を削り土色の地肌を出して青とのコントラストで組紐文を浮き上がらせている。細いスリットを入れて紐が上下に交差する様子を丁寧に表現している [15世紀/131×144×40mm/ウズベキスタン、ブハラ]



浮彫施釉レンガ:レンガを立体的に浮彫にし、施釉し、焼成したもの。中央アジアのイスラーム建築の特徴的なもの。このような立体レリーフは、中国の磚(セン)の影響ともいわれている [15世紀/163×203×52mm/ウズベキスタン、ブハラ]



ハフトランギー・タイル:よく見ると白い花の部分には金彩が施されている。青く光るタイルからかすかに金が輝いている。ティムールの心意気を表すような金の使い方でもある [15世紀/262×292×20mm/ウズベキスタン、ブハラ]



カットワーク・モザイク:光沢のある青色と黄色のタイルを不定形にカットしたものを、寄木細工のように加工したもの。イスラーム建築で求められる光(光沢)と多彩色を同時に実現し、その真髄が感じられる [15世紀/114×130×19mm/ウズベキスタン、ブハラ]

- イスラームの中でも、中央アジアはレンガを使ったさまざまな立体装飾やレンガに施釉したものの、そして平面的ではあるがモザイクタイルや装飾タイルの手法・技法の数々など魅惑に満ちている。モンゴル系民族の跋扈やトルコ系民族の覇権などがあり、同じイスラーム圏域とはいえ東西文化が激しく交流したこともその魅力の源と考えられる。
- 14世紀末、ティムールは中央アジアを中心に、現・インドのデリーを占拠、シリアを攻略、オスマン帝国を打ち破って現・トルコのアナトリア地方も占拠し、広大な領地を手中に収める。彼は首都をサマルカンド(現・ウズベキスタンの第2の都市)と定め、モスクなど多くの建築をつくり、イスラーム建築のラッシュであった。イスラームで「聖なる青」といわれる青いタイルを仕上げに多く使い、サマルカンドは「青の都」と呼ばれる。
- 多くのモスクやメドレセ(イスラーム教義を勉強するところ)などの建築物をつくるにあたり、さまざまな地域の、さまざまな職種の人々を集め、技術を集積した。バグダッド、イスファハン、ダマスカス、デリー、アンカラなどから建築家、職人、技術者を集め、イスラーム建築の集大成が15世紀サマルカンドを中心に行なわれ、「イスラーム建築の完成時期」と呼ばれている。その後のイスラーム圏を支配したサファヴィー朝、インドを支配したムガル朝の建築に大きな影響を与えることになる。
- この地域では、レンガ(立体)からタイル(平面)の手法もすべて使われている。レンガの組み合わせデザイン、レンガの浮彫(立体的に彫り込んだもの)、穴あきレンガ、そしてレンガへ施釉し色をつけたもの、カットワーク・モザイク(大きなタイルを小片に加工して組み合わせるデザイン)、ラスタール彩、絵付け、多色のハフト・ランギー(先号で紹介、サマルカンドが発祥といわれている)、金彩、白地藍彩など、イスラーム建築タイルの見本箱の様相を帯び、体系的に完成されたといえる。
- 世界のタイル博物館の山本コレクションでは、中央アジアのタイルコレクションは多くはないが、当時の幅広い手法のタイルを展示公開し、イランを中心とした平面的なイスラームタイルとは一線を画している。

1—マゴキ・アタリ・モスク:初期浮彫施釉レンガは、アーチ上部やミナレット上部に使用されていたようだ | 2—ウルグ・ベク・メドレセ:15世紀初めに完成した中央アジアを代表するイスラーム建築。外部装飾には施釉レンガの幾何学デザインが左右に配され、さまざまな幾何学模様タイルが使われている | 3—カリアーン・ミナレット:12世紀に完成したブハラのカリアーン・ミナレットでは、20種類以上の幾何学デザインで塔を巻いている。シンプルな土色でありながら陰影の妙には感動する

ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。

